

平成 30 年度 第 1 回弘前市立郷土文学館運営委員会会議概要

◆平成 31 年 3 月 25 日（月）14：30～16：30

◆弘前図書館 2 階 会議室

◆出席委員：井上委員長、藤田委員、木村委員、仁平委員、浅瀬石委員  
（出席 5 名 尾崎委員欠席）

◆弘前市立郷土文学館側：戸沢生涯学習課長、庄司図書館・郷土文学館運営推進室長、(株) 図書館流通センター山谷弘前市立図書館長、榎引弘前市立郷土文学館企画研究専門官

<p>庄司室長</p>	<p>それでは定刻となりましたので平成 30 年度第 1 回郷土文学館運営委員会を開催いたします。</p> <p>弘前市立郷土文学館運営委員会は弘前市立郷土文学館条例第 14 条第 3 項の規定により、委員長が議長となることとなっております。それでは委員長、お願いいたします。</p>
<p>委員長</p>	<p>それでは、ただいまから平成 30 年度第 1 回弘前市立郷土文学館運営委員会を始めさせていただきます。</p> <p>まず案件でございますけれども、案件の 1 といたしまして、平成 30 年度弘前市立郷土文学館の事業実績について、榎引企画研究専門官のほうからご説明お願いいたします。</p>
<p>榎引企画研究専門官</p>	<p>はい、それでは説明させていただきます。</p> <p>資料のページ番号 1、「平成 31 年度郷土文学館運営方針について」というところから始めさせていただきます。</p> <p>今現在、指定管理の下にありますので少し事情が特別でありまして、その部分についてまず説明させていただきます。</p> <p>運営方針の 1 番、弘前・津軽ゆかりの文人たちの資料の「収集・保存」これが 1 つ目です。「収集・保存」を基本とし、しっかりとした「調査・研究」これが 2 つ目です。それを踏まえた「展示・公開」これが 3 つ目です。ここにどこの文学館でも共通する 3 つの要素が書かれています。</p> <p>2 番ですが、「展示・公開」等は、この次からが大事にしているところなのですが、「文学研究者・愛好者のみならず、教育や文化振興、そして観光にも資するものとする」ということです。従来であれば文学研究者・愛好者中心であったものですが、ほか</p>

の部分にも力を入れていきたいという方針になっています。

それから3番ですが、単独の指定管理者ではなく「TRC・アップルウェブ・弘前ペンクラブ共同事業体」という3者の共同事業体という特別な関係にありますので、その運営が円滑かつ成果あるものとなるように努める。これが指定管理になっての特別な事情を踏まえた3つ目の方針となります

その中で重点事項としては、1番「文学講座、朗読会などの充実」とありますが、文学講座に加え、昨年度より始めた「ラウンジのひととき」（朗読と音楽の会）、映画上映会、開館記念無料開放など、多彩な催しの充実を図っております。

2番としては「展示の工夫」です。一般の来館者にも展示の内容が理解しやすいよう、展示の構成やキャプションなどをわかりやすく魅力あるものにするということです。例えば、今開催している太宰展に入ると右側に大型パネルがありますが、あぁいったものは去年の「加藤謙一展」から始めたものでありまして、構成の仕方が一般の人には入りやすいものとなるようにしております。またキャプションについても簡潔に終わらせるのではなく、一般の方にもわかりやすいような説明を丁寧に加えるような形をとっております。

3番「ホームページの充実」ですが、内容の更新を迅速に行うとともに、収蔵資料紹介コーナーの新設の準備を始めております。今現在はやられていませんけれどもデジタル化などを通して、新たな資料をホームページを通して紹介していく準備を進めていきたいと考えております。

それから最後のところに今回の企画展について書いてありますが、第43回企画展「太宰治生誕110年記念展—太宰治と弘前—」は、「弘前」「津軽」をテーマの中心に据え、ここにほかの太宰展を違うところがあります。それから飛びまして、最後から2行目の終わりのほう、県内外の関係施設との連携によりその機運を高めていきたい。現在、青森県近代文学館からたくさんの資料を借りてきております。それから新聞でも大きく報道されましたが、三鷹のほうから太宰が旧制弘前高等学校時代に使っていた電気スタンドを借りてきました。五所川原やその他の施設ともどんどん連携をしてこの1年間、太宰治をPRしていきたいと考えております。

運営方針については以上です。

続いて、次の事業実績のほうに入りますが、2 ページ。最初は企画展ですが、これはほかの文学館にはなかなかない1年という長い期間の開催期間ですので年度をまたぎます。それで上のほうは昨年1月から始まった「名編集長・「加藤謙一展」、それから下のほうが31年1月から始まった「太宰治展」、2つを掲げてあります。年度をまたぐということでご理解ください。

それから2番のスポット企画展。こちらは四季折々、タイムリーなもの、重要だと思われるものを小回りが利く形で、春夏秋冬の年4回やっております。今年度は、春は「作家が描いた観桜会」、夏は『『少年倶楽部』傑作選』、秋が『『鞍馬天狗』』ですが、いつもと違うのは冬が本来ならば1回だけなんです、作家の長部日出雄氏が急逝されましたので、急遽、スポット展の特色を活かしまして「長部日出雄追悼展」を前半に、「新収蔵資料展」を後半にということで、冬は2つのものを行いました。

続きまして3ページのほうに移りますが、常設展については省略いたします。4番の企画展記念行事として記念講演会、今回は加藤謙一の四男、国立公文書館の館長である加藤丈男氏に講演していただき、右側の備考にありますように100名を超える、多くの人にご来場いただきました。

それから5番の文学講座は例年行われている通り、5月から12月までの第3土曜日、年8回を行いました。第1回目は仁平先生、第2回目は井上先生、第3回目は世良さんというふうに委員の方にもご協力いただき、内容の充実に努めてまいりました。

4ページに移りたいと思います。4ページと5ページには昨年度から新たに始めたものを並べております。6番が「ラウンジのひとつ」。5月から12月までの第1土曜日に全8回を行いました。音楽・朗読といったものを入れて、文学の研究者・愛好者でない方にも親しめる内容としております。第6回目と第7回目は本日ご出席いただいている藤田晴央さんに自作を語り、それからギターの伴奏を付けながらの朗読ということでお願いいたしました。

それから、文学散歩も新たに行い、「方言詩ロードを歩く」（7月）と、「加藤謙一文学散歩」（10月）を行いました。残念ながら10月は雨天により座学に変更となりました。

それから8番の無料映画上映会も今回初めてのものです、「加藤

<p>委員長</p>	<p>謙一展」にちなみ、大佛次郎の「角兵衛獅子」の映画上映会を行いました。</p> <p>最後の9番、無料開館ですが、平成2年の7月1日に郷土文学館が開館したということで、6月30日と7月1日にイベントを行って無料開放し、資料にありますようにクイズラリーとかスタンプ、ワークショップという子供たちにも楽しめる内容を織り込んで実施してまいりました。</p> <p>これらが平成30年度の実施内容となります。以上です。</p> <p>ありがとうございました。ご質問等ございませんか。</p> <p>よろしいですか。</p> <p>それでは、30年度についてはそのようだったということで、案件の2に移らせていただいてよろしいでしょうか。</p> <p>では案件の2、平成31年度弘前市立郷土文学館事業計画についてということで、続きまして榎引企画研究専門官お願いいたします。</p>
<p>榎引企画研究専門官</p>	<p>はい。先ほどの続きの6ページをご覧ください。平成31年度事業案です。</p> <p>企画展については、1月から始まっている「太宰治生誕110年記念展 一太宰治と弘前一」、これが12月までとなりますが、先ほどお話ししましたとおり年度をまたぎますので、次の、新元号の1月から3月までが年度末ですが、「岩木山と文学」という展示を現在予定しております。岩木山については観光客が非常に驚くところが多いのですが、なかなか文学との関わりを示すことができませんでしたので、それを予定しておりますが、準備の状況でまたいろいろ変更があるかもしれません。</p> <p>それから2番のスポット企画展、先ほどお話ししましたように春・夏・秋・冬ですが、春は太宰治と同じく生誕110年を迎えた今官一、彼と太宰治との交流。夏は「太宰治の逸品」ということで、今現在企画展で展示できない逸品を展示しようというのが夏です。それから秋は、青森県の郷土文学の研究の礎を作った青森県郷土作家研究会が60周年を迎えますので、その展示を予定しております。それから冬なんです、1つ飛ばしまして、新収蔵資料展、1月からになります。その前の「現在活躍中の作家展」、こちらは11月から12月にかけてですが、昨年度、藤田委員から現在活躍中の作家についての展示が前の年度なかったということから、今年度の展示に入れることとなりました。</p>

<p>委員長</p>	<p>6 ページについては以上であります、続いて 7 ページ。文学講座から無料開館までは先ほどお話した形、同じような形で、内容のさらなる充実に努めて実施していきたいということで説明は省略させていただきます。</p> <p>それから、次の 8 ページが利用状況になるのですが、そちらまで入ってよろしいでしょうか。それとも、一旦切りましょうか。</p> <p>ではちょっと一回、切らせていただきます。</p> <p>これまでのところで何かご質問等はございますか。</p> <p>議長から質問するのはあまりよろしくないのですが、映画上映会についてちょっとお伺いしたいのですが、これはフィルムで上映しているのでしょうか。</p>
<p>榎引企画研究専門官</p>	<p>これは DVD を使っています。フィルムを使うと聞き取りづらい部分も出てきますし、高い料金でないと駄目ですので、DVD は権利料だけを支払えばいいということで、こういう形にしています。</p>
<p>委員長</p>	<p>ありがとうございました。</p> <p>ほかに何かありませんか。</p> <p>それでは続きをお願いいたします。</p>
<p>榎引企画研究専門官</p>	<p>それでは続いて、8 ページのほうをご覧ください。郷土文学館利用状況ということですが、平成 28 年度は 2,455 人でした。それから平成 29 年度は 3,320 人と、久々に 3,000 人を超える数になって、平成 30 年度は 2 月と 3 月の数が入っておりませんが、2 月は 225 人、3 月は昨日までで 242 人、合計 3,655 人。昨日の段階で昨年度より 300 人以上入館者が増えているという状況です。それから 1 つだけ補足させていただきますと、平成 29 年度の 4 月が 689 人とここだけ人数が多いのですが、これは指定管理開始記念の無料開館を 4 月 1 日と 2 日に行っており、2 日間で 303 人という入館者数が影響しています。今年度は指定管理開始記念のイベントがないということで様々な工夫をして、昨日現在で 3,655 人となりました。</p> <p>それから 9 ページには平成 24 年度からの観覧者数、一番右側の欄になりますが、平成 24 年度が特別多くなっています。4,574 人。これは「寺山修司展」ということで、ほかの館も同様なのですが、寺山修司・太宰治となると例年に見られない入館者数があるということで、平成 24 年度は 4,000 人を超えていま</p>

	<p>す。ここ数年、入館者数が 3,000 人を切るが続いたのですが、平成 29 年度は先ほど申し上げたとおり 3,320 人、平成 30 年度は昨日現在で 3,655 人と漸増傾向にあります。</p> <p>10 ページ以下はずっと省略しまして、38 ページまで進めてください。郷土文学館所蔵資料一覧とありますが、一番右端、下のほう、17,571、これが平成 28 年 12 月 31 日現在の所蔵資料数で、現在 18,000 点に向かっている状況にあります。</p> <p>それから残りの部分についてはアンケートですが、ここで展示を見て大変良かったというお言葉などが多くなっております。こちらで意図した、文学の研究者・愛好者のみならず一般の方も楽しめる内容ということについては、映画上映会、クイズラリーといったものに対する反応もあり、その影響は結構出ているのかなと思います。あとは、入ってみるとなかなか展示の内容が充実しているという意見が出ております。以上であります。</p>
委員長	<p>ありがとうございます。何か所か止めましたが、ずっとお話しいただきました。先ほどもちょっと言いました、平成 31 年度事業計画も含めまして、ご質問等ございますか。</p>
委員	<p>FM アップルウェーブさんも三者共同事業体のほうに入っていると思うんですけど、FM アップルウェーブとの協力した企画などがあればお知らせください。</p>
櫛引企画研究専門官	<p>FM アップルウェーブは、各家庭に配布されているフリーペーパーがありますが、文学館紹介に大きく紙面を提供していただくなどして、広報の面で非常に協力いただいております。それから 4 月から 12 月までの期間で、企画展にちなんだ朗読を行っております。朗読は不肖私が行っていますが、一昨年が石坂洋次郎の『石中先生行状記』、去年は「加藤謙一展」にちなんで佐藤紅緑の『あゝ玉杯に花うけて』を朗読しております。今年は太宰治展ということで太宰治の短編を取り上げて読んでいきたいと思っています。朗読という形で市民の方にも企画展について伝えていくということを行っています。</p>
委員	<p>それが非常にいい、聞きやすい、面白いという声を聞きましたので、もしよろしければ、来年度からの報告書にもこういうことをしましたということで載せていただければいいなと思いました。</p>
委員長 委員	<p>ありがとうございました。ほかにご質問等ございませんか。よろしいですか。</p>

<p>委員長 委員</p>	<p>はい、お願いします。</p>
<p>榎引企画研究専門官</p>	<p>少し戻るんですが、平成 31 年度の運営方針のところ新収蔵資料の紹介コーナーのところについてなんですけれども、今美術館とか文学関係についてはよくデータベース方式で調べられるようになっているところが結構多いんですけど、こちらでも同じような形で進められているということでしょうか。</p>
<p>委員</p>	<p>内部のほうではそれに向けていろいろやっておりますが、まだ外のほうから検索できる、という段階までは至っておりません。</p>
<p>榎引企画研究専門官</p>	<p>いずれはホームページ上で検索できるようになるということですか。</p>
<p>委員長</p>	<p>将来的には、しっかり準備できれば、そういう風にしていきたいと考えております。</p>
<p>委員</p>	<p>よろしいですか。</p>
<p>委員長</p>	<p>はい、ありがとうございます。</p>
<p>委員</p>	<p>他には何かありませんか。</p>
<p>委員</p>	<p>はい。2点あるんですが、まず1点目は今話題にもなりました平成 31 年度の事業計画にある「現在活躍中の作家展」についてなんですけれども、津軽出身で現在活躍されている作家さんといえますと、どのくらいの作家さんが対象になるのかなと思ひまして。と申しますのも、エンターテインメントまで含めると、意外と結構幅広くなってくる。それこそ、文学という概念をどのように考えるのかという話になってくる気がするんです。文学の概念、みたいな。で、その辺りでどのような形で今お考えなのか、もちろんまだかなり先のことですので、あくまで今の時点でのお考えで結構ですので。</p>
<p>榎引企画研究専門官</p>	<p>今現在予定しているのが、例えばあのルポライターの鎌田慧さん、それから文芸評論家の三浦雅士さん、それからエッセイストの根深誠さんですね。そういう方も含めて、いわゆる小説とかそういう分野だけではなくて、広く、いわゆる文学系とは一線を画するようなものも取り入れる形で、全国レベルで活躍している方ということ考えております。</p>
<p>委員</p>	<p>例えば今弘前出身の方、弘前在住の方でライトノベルの作家なんかでも売れている人がいますよね。ですが、ああいう人を入れていくと文学館としておそらく脚光を浴びる反面、扱いの難しさもあるだろうと。すなわち、例えばそれらっていえば水物ですので、数年後その作家が忘れられている可能性がありますよね。あ</p>

<p>委員長 委員</p>	<p>るいは作家を辞めている可能性だってある。そう言ったことも含めて、難しさがある反面、どこまで範囲を設定していくのかという辺りは、さらに検討の余地があるのかなと、少し思っていた次第です。</p> <p>もう1点あるということですが。</p>
<p>委員長 委員</p>	<p>はい。来館者の声のほうで、平成29年度の市民からの声のところですけど、「撮影OKというのは面白い。しかし投稿NGというのは口コミが封じられるのではないか」という意見がありましたけれども、これ、投稿NGというのは要するにたぶんSNSのことですよね。今、実は美術展にしても文学展にしてもSNSによる訴求力というのは、特に地元を超えて人を集めるためにはかなり無視できない意味を持ってきていると思うんですけども、確かに一方で転載ということについてはどんどん上げられてしまうというリスクもありそうな気がする。特に、その展示のために借りてきた、というようなものですと資料のデータだけアップすることに問題があると思う反面、そのSNSによる拡散力どんなふうに活かしていくのかということも結構重要な問題のかなと思いますので、ただその点について、この意見は平成29年度のもので少し状況が違うかもしれませんが、何かありましたら。</p>
<p>榎引企画研究専門官</p>	<p>SNSの時代に対応していくという方向は考えているのですが、「加藤謙一展」の時にアニメとか漫画も一部対象になっていましたので、簡単に撮影されるとそれが著作権その他、法律上で面倒なことがあるということで、昨年度は逆に撮影は不可という形にしております。他の展示についても逆に厳しくしている状況にあります。</p>
<p>委員</p>	<p>はい。そうですね、去年の「加藤謙一展」自体その、まさにハードルが上がる機会だったなという感じがありますけれども。</p>
<p>榎引企画研究専門官</p>	<p>そういったものと新時代の考えをしっかりと踏まえながら進めていきたいとは思っています。</p>
<p>委員</p>	<p>文学館のほうでフェイスブックやツイッターのアカウントを、っていうのはなんかちょっと難しいところはあるのでしょうか。それによる拡散っていうのは今結構大きな部分で、とりわけ観光という分野で。太宰治については今それこそサブカルチャーを通して太宰を見ることがものすごく拡散している時代ですので、太宰について何かやっているということはそれこそ日本中から結構人</p>



<p>櫛引企画研究専門官 委員</p>	<p>が来得るわけなんですよ。でもおそらく太宰ファンには、もちろん「太宰治と弘前」というここでしかできない展示であるというその強みはある一方、その分そういうような言わばミーハー的なファンにはなかなか情報が届きにくいのかも。そうすると、その情報をどのように届けていくことができるだろうっていうことは、ちょっと私のほうで関心を持っているといいますか、SNSを使っている人間ですので。その辺りで少しく、気になったという次第です。</p> <p>ありがとうございます。</p>
<p>櫛引企画研究専門官</p>	<p>これはつまり、どこから NG ということについては、平成 29 年の段階で明確に書いてあったんでしょうか。つまり、例えば静止画はいいけれど動画は駄目だとか、音声付きは駄目だとか、たとえばインスタグラムなんかだと自撮りの場合に自分の後ろのものも入ってしまうんですよね。そういうこともあるので、どこら辺から NG とかっていうのは確認しておかないと。</p>
<p>委員</p>	<p>ええ、そういうことを一つひとつやっていくのは、例えば去年の「加藤謙一展」などの場合大変なことになりますので、全面的に NG にしていました。</p> <p>全部 NG だったんですね。</p>
<p>櫛引企画研究専門官</p>	<p>はい。今年の太宰展についてもいろいろ厳しいものがありまして、基本的に全館撮影 NG と。入口に太宰のマントを用意していますが、ああいうところだけは撮影 OK としておりますが。</p>
<p>委員</p>	<p>先ほどもほかの委員がおっしゃたように、テキストベースのツイッターとかだったら画像なしでもいけるんですけど、誰でも今日日わかるはずなんだと思うんですけど、画像付き、動画付きのインスタグラムにおおむね移行しちゃってるので、そうすると画像なしで拡散するのは彼らにとって非常に難しいんですよ。画像があるのが当たり前みたいになっているので。だから、テキストベースで育った世代とそうじゃない世代で違ってくるので、どううまく立ち回る、伝えていくのかという問題について問われてくることを知っておくべきだと思います。</p>
<p>委員長 委員</p>	<p>ありがとうございます。他によろしいですか。</p> <p>撮影のルールはヨーロッパではルーブル美術館をはじめ、おおむね OK です。最近では東京でも OK のところが出てきている。先だって、国立新美術館の特別展では撮影 OK の展示室を設けていました。文学館の場合、アップで取られないような場所</p>

	<p>を設定すればいいと思うんです。やはり、弘前市立郷土文学館に行ってきたよ、面白かったよということを画像として SNS に上げられるような環境をこちらが提供してあげることが大事だと思うんです。展示室の入口に入って、下にラインを引いて、ここからなら撮っていいですよと。でも展示室の中のショーケースは駄目ですよ、という仕切りがあればいいと思うんです。入り口だけでなく他にも出口近くで振り返ってもいいですし、そういう風な工夫をしてなるべく SNS できちんと扱ってもらえるような形にすればいいんじゃないかなと思いますね。</p> <p>ちょっと話が変わりますが、「現在活躍中の作家展」などで、どうしても散文系の作家に行ってしまう傾向があるんですけど、昨年、青森県近代文学館で「平成の文学展」というのを開催しまして、そこでは詩の分野も取り扱ってました。そのように、散文作家にこだわらない視点も大事だと思うんです。次の企画展の「岩木山と文学」をタイトルだけから連想すると、かならずしも昔の文人だけではないイメージが強いですね。だから、それを期待して見に来た人たちは現代の作家や詩人たちによる作品も見たい、そういう気持ちがあるんじゃないでしょうか。今の詩人や歌人たちの作品を書家の方に書いていただくとか、展示物としてアートとして見せるような工夫が必要ではないかな。ただ昔の有名な作家の原稿を出すというだけではなくて、ちょっと工夫が必要かな、と思います。</p> <p>いかがでしょうか、櫛引企画研究専門官。</p>
<p>委員長 櫛引企画研究専門官</p>	<p>文学館の最初の基本方針のところにもありましたように、一般の方にも見ていただきたいという方向にありますので、今、先生方にご指摘いただいた点については現実的にどこまでできるのか、検討していくつもりでおります。</p> <p>他に何かありますでしょうか。</p> <p>少しだけ言わせていただきますと、さっき他の委員が言われていたことについて、例えば現在活躍中の作家というと、ライトノベル系とか何かそういうのと、それから文学って何なのかっていう大きな見方をすると、例えば「加藤謙一展」をやりましたけれども、例えば実際の漫画の実作であるとか、その原作ですとか、例えばそういうその映画なんかを観るための機械、装置についての、あるいは出来上がったコンテンツやソースなどについての批評みたいなものがあったら含めて、言ってみれば美術観批評なん</p>

	<p>かも含めて、雑誌なんかごっちゃなんですよ。例えば美術系の新しい機械を紹介する雑誌だと機械がいいんじゃないかと元のソースがいいからきれいに見えているだけなんじゃないか、みたいに両方入り組んじゃってるんですね、批評って。かつて知られていた文学というコア部分が、全部切り離してしまうと、かえってわからなくなったりするんですよ。それよりだったら少し広めにとって、その中からどういう風に今できるかという風に見ていったほうがいいと思うんです。そこは柔軟に行くしかないのかなとも思います。</p>
<p>委員長</p>	<p>他に、この件について何かありませんか。</p>
	<p>他の件でも構いません。</p>
<p>委員</p>	<p>昨年からですか、ラウンジの催しを積極的に催されていて、大変素晴らしいなと思っております。企画もこう、偏ってなくてバラエティに富んでいて、文学館としてはとてもいいですよ。ラウンジという場所なんですけどいささか狭苦しいという印象で、空間としてはまあまああるんだけど、椅子が大きすぎるのかな。その椅子を、このフロアみたいな椅子にすればたぶん1.5倍くらい客席は確保されるだろうということがまずありますね。</p> <p>それから、「ラウンジのひととき」に私も出演者として出させていただいたんですけど、楽器をもっと使いたいなと思いました。ピアノ自体は教育委員会の管轄であると思うんです。それをラウンジにその日は持ってくるという風な取り組みのようなものがあってもいいのではないかなと思います。ピアノに限らずどんな楽器でも、各連携先との関係を深めていくという意味で申し上げます。</p> <p>それから大変難しいことなんですけど、ラウンジで朗読をしてみte感じたのは、あそこはマイクがないんですけど、マイクがなくても声が響くんですね。ですから大方の方はよく聞こえてましたとおっしゃってました。ですが、ご高齢の方で音が割れて聞きづらかったという方がお一人ありました。確かにあその壁面ってというのはものすごく硬い壁面で、空間がいわゆるホールの感じなものですから、座った場所によっては耳にがんがん響くことがあるようです。そういうことを考えてみると、いい会場というのを別に設けてもいいのかなという風に思うことが多い。もうちょっと音響も安心して提供できるような空間で、このような催しをなさるといいのかなというのも考えます。あるいは</p>

<p>委員長 榎引企画研究専門官</p>	<p>音響の専門家の方に見てもらって、マイクとスピーカーを設置すればそのまま解決されるということであれば、検討する価値があるのではないかな、と。</p>
<p>委員長 榎引企画研究専門官</p>	<p>どうでしょうか、榎引さん。</p> <p>そうですね。文学講座は参加者十数名だったのですが、「ラウンジのひととき」は参加者三、四十名ということで手狭になっていることは確かです。今おっしゃられた会場ですが、楽器については、ギター、マンドリンの他に尺八とかも取り入れたりして、様々なものでやっております。結構こう、いいなという感じを思っておりますので、工夫していきたいと思っております。会場の件については専門の方々に現実的な意見を聞いて、できることをしっかりとやっていきたいと思っております。</p>
<p>委員長 榎引企画研究専門官</p>	<p>ありがとうございました。僕は最後の「無料映画上映会」についても音声少し聞き取りにくかったなというコメントがあって、これも、元のソースの音声聞き取りにくいのか、再生された音声が聞き取りにくいのか、ちょっとわからないなと思いました。</p>
<p>委員長 榎引企画研究専門官</p>	<p>それについては、ちゃんとしたスピーカーではなのです。マイクを再生機の近くに置いて、そのマイクがちょっと一部音質が良くない形で響いたようで、それが原因だと思います。</p> <p>なるほど。そうするとやっぱり、先ほど言っていたように、専門の方に一回見てもらおうと、ぐっと改善されるということはあるかもしれないわけですね。</p>
<p>榎引企画研究専門官 委員長 委員</p>	<p>はい、そのとおりです。</p> <p>他に何かありませんか。</p> <p>はい。皆さんがおっしゃったことに続く感じなんですけど、今、廃校になる小学校とか中学校が多くて、実は三沢市の寺山修司記念館も廃校になった小学校からピアノを譲り受けて、設置してコンサートをしたりしているという最近の話を聞いたりしていましたので、もし例えば弘前市の管内でそういうつながりを持ったら面白いのかなと思いました。</p> <p>それから今すごく、SNSの問題はすごく私も気になっていて、若い人たちに人気の文学館が前橋、世田谷、神奈川、仙台あたりなんですけど、そこはやっぱり撮影して発信するための場所ってというのが設けられていたり、撮影自由であったり、それからインスタ映えするように作家の詩とか言葉を大きくプリントして</p>

	<p>外側に垂らしたりと、かなりビジュアル面でも、一般の人でも文学に親しめるような工夫をしているので、そういう館のこともすごく参考にこれからなるのではないか。ただいずれにしても、特にこの二年間で入館者数がすごく増えていますし、「ラウンジのひとつとき」にも今回初めて文学館に来ましたという感想もありましたし、音楽とか美術とかそういうアートとか、いろいろなものとコラボしていくきっかけをこの二年間で作っていただければな、と思っています。</p> <p>それからラノベの問題ですけれども、弘前はライトノベル作家や漫画家が在住して書いているという点ではすごく面白い、ユニークな場所なんですけれど、さっき他の委員の方もおっしゃったようにどこからが文学で、どこからがそうでないかの線引きが難しいと思います。この施設は図書館と郷土文学館の間に展示するスペースがありますよね。図書館であれば企画している展示スペースですか。</p>
<p>櫛引企画研究専門官 委員</p>	<p>図書館のロビー展示ですね。</p> <p>はい。あのロビー展示を利用して、図書館と郷土文学館の共同展示みたいなものをあの境界辺りにできたらすごく面白いんじゃないかな、と。例えばこの「現在活躍中の作家展」の本展示は郷土文学館の中でやって、そのサブ展示でラノベ関係をそのロビー展示でやって、そういう本を図書館で借りてもらいたい企画にしたら、図書館に来た人も文学館に来るとか、文学館に来た人も図書館に来るとかという流れにできていいのかなあと思いました。</p>
<p>委員長 櫛引企画研究専門官</p>	<p>それから、SNSの問題でいきますと、今言ったような文学館のほとんどがツイッターとかフェイスブックなどのページを持っていますので、例えば、私なんか運営委員なんですけれども、そのお手伝いみたいなことはできたりするのかな。アカウントがあって複数の人が、職員の方とか運営委員で得意な方で、今こういう企画やっていますよっていうのを弘前の郷土文学館が自前で発信することができれば、こちらに直接お手伝いに来ることができなくてもそういうソースでお手伝いできる可能性があるなあと思っています。以上です。</p> <p>よろしいでしょうか。</p> <p>はい。いろいろな形の連携とか協力ですね、そういった可能性を探っていきたいと思いますね。</p>

<p>委員長</p>	<p>いろんな可能性が広がりますね。</p> <p>案件の 2 に関しまして、全部まとめて言ったところなんですが、案件の 2 について他に何かありませんか。よろしいですか。</p> <p>それでは案件の 3 に進めさせていただきまして、案件の 3 は、その他。その他というのは何かご質問やご意見等、この際でするので何かございませんかということですので。</p> <p>私、1 つ確認したい点がありますがよろしいでしょうか。郷土文学館所蔵資料数一覧、38 ページです。ここを見ると、フィルム、録音テープ、スライド、新聞、楽譜、レコードというのがあります。で、このフィルム、録音テープ、スライド、レコードっていうのはちょっと難物かと思うんですね。フィルムというのは映画フィルムのことですか。</p> <p>そうですね。</p> <p>上映できる機械はありますか。</p>
<p>榎引企画研究専門官</p>	<p>いえ、上映用には使っておりません。資料としてということですよ。</p>
<p>委員長</p> <p>榎引企画研究専門官</p>	<p>所蔵はしているんですよ。</p> <p>はい。所蔵しているものは一部ガラスケースの中に入れてたり、あと写真フィルムであれば一部現像して展示をしたりという使い方をしています。</p>
<p>委員長</p> <p>榎引企画研究専門官</p>	<p>録音テープは再生機を持っているんですか。</p> <p>そうですね。必要であればカセットデッキとかありますので、例えば高木恭造のかつての方言詩の朗読とか、そういったものを例えばカセットテープとか、そういう古い時代のものが多いのですが。</p>
<p>委員長</p> <p>榎引企画研究専門官</p>	<p>オープンリールで再生するのは大ごとなんですね。それからスライドは、写真のスライドのことなんですか。</p> <p>そうです。昔風のもんです。</p>
<p>委員長</p>	<p>ポジフィルムですね。これはまだ映写する、スライドのプロジェクターはあるんですか</p>
<p>榎引企画研究専門官</p>	<p>プロジェクターはありません。そういう要望も今のところはありません</p>
<p>委員長</p>	<p>そこは今あまり問題ではなくて、蓄積されてあったものが、例えば大学図書館なんか、どこの図書館も同じだと思うんですけど、だんだんそれが再生できなくなってくるんです。十分に予算</p>

<p>委員</p>	<p>があれば、デジタル化できるんですけど、できないとそのまま死蔵するだけになっちゃうんですね。たぶんレコードも同じなんです。</p> <p>レコードも同じような問題が。レコードっていうのはアナログのレコードなんですけども、30センチくらいの。その点でやっぱり図書館とか文学館とかがずっと抱えているというのが問題になっているようなので。</p>
<p>委員長</p>	<p>わかりました。その情報、ここで出したいと思っていました。</p>
<p>委員</p> <p>楡引企画研究専門官</p>	<p>その他になるのかどうかわかりませんが、基本的なスタンスの話なんですけど、前回の時にも申し上げたと思うんで、今回も言いますが、弘前市立郷土文学館というのを、弘前市というエリアだけじゃなくて、津軽というより大きな地区の代表的な文学館という風にとらえるべきではないのか。黒石市や大鰐町や五所川原市でもそういうものってないわけですから。やはり弘前中学出身の秋田雨雀の常設展示は必要でしょう。また企画展によりますけど、北畠八穂もたくさん津軽を素材にしています。企画展を行うときに柔軟な、もっと広い視点で青森県あるいは津軽に関わる作家や詩人を取り上げていく方向性を積極的にとってほしいと思います。</p> <p>それでもう一つ、運営方針についても、1番に「収集、保存」、「調査、研究」、「展示、公開」という3つの柱、とあるんですけど、どうしてもこの中では「展示、公開」のほうに話がいってしまいがちなんですけど、「調査、研究」というのも大事な仕事ではないかなと思うんです。もしそういう体制が整えば、弘前市立郷土文学館発行の調査研究書、固いものじゃなくていいんですけども、楡引さんの研究なされていることの発表とか、あるいは世良さんのエッセイとか、仁平先生や井上先生の文献でもいいですし、木村さんも普段の文化部でのレポートでもいいですし、そういったものを発行してそれが一般の人たちの手に取ってもらえるようになれば、持ち帰った後も読み返せますし、この郷土文学館はがんばってるねっていう風なことになるのではないかな。</p> <p>まず、郷土文学館の範囲ということですが、常設の場合は今の10人というのがなかなかこう、いろいろな事情があって簡単には動かせないんですが、先ほどおっしゃった黒石の秋田雨雀とか、大鰐の増田手古奈とか、北畠八穂とかも視野に入れて資料を</p>

<p>委員長</p> <p>委員</p> <p>榎引企画研究専門官</p> <p>委員</p> <p>委員長</p>	<p>収集、保存に努めておりますので、そこをしっかりと当座研究していくってことは続けていきたいと思っております。今までも雨雀展をやってますし、これからもそういう方向性で、折にそういったものを入れてですね、やっていきたいと思っております。</p> <p>あと、調査研究書については今現在の人員とか置かれている業務の状況など極めて厳しいものがありますが、日々展示を中心とした形で調査、研究をやっておりますので、そういった蓄積はしっかりとしていきたいと思っております。</p> <p>ありがとうございます。</p> <p>他に何かございますでしょうか</p> <p>あの、「加藤謙一展」非常に素晴らしかったと思うんですけども、この間池袋に行ったらトキワ荘の大パネルがなんかできていて、加藤謙一とトキワ荘を推す感じの宣伝が出ていたので、あれをそのまましまうのはもったいないと思って、パネル展みたいに飾れることがあればいいなと思いました。</p> <p>展示スペースの関係もありますが、そういうパネル展という形での可能性もあるかと思えます。</p> <p>出張サービスでどこかに。</p> <p>はい、ありがとうございます。よろしいでしょうか。</p> <p>よろしいですか。それでは案件3のその他ということもそこまでにしたいと思えます。</p> <p>それでは以上で会議案件の1、2、3、全部終わりましたので、これで平成30年度第1回弘前市立郷土文学館運営委員会を終了ということにさせていただきます。</p> <p>(館長あいさつ、事務局連絡 省略)</p>
--	---